

あとがき

本報告書の「はじめに」にもあるように、総合科学研究科・総合科学部の自己点検評価報告書は、平成 21 年に 3 年に 1 度の発行と改められた。この決定に基づき、いま、皆さんのお手元にある報告書が作成された。大学院の部門や学部プログラムなどを代表する形で選出された評価委員会のメンバーは、青木利夫、於保幸正、近堂徹、嶋市敬、高橋憲雄、橋原孝博、長谷川博、平手友彦（副委員長）、船瀬広三、三木直大、山崎昌廣の各氏（五十音順）と水羽信男（委員長）である。

この報告書の作成にあたっては、支援室長を中心とする事務の皆さんに膨大な資料の作成をお願いし、同時に教員へは、それぞれの評価主体の責任者に総括文書の作成を依頼し、その両者を評価委員会と研究科長室会議とでまとめあげるという手続をとった。たとえば総合科学研究科の特徴の一つである 21 世紀科学プロジェクトに関していえば、その様々な活動に関するエビデンスについては事務方の協力を得ながら整理し、21 世紀プロジェクトの責任者に報告書の提出をお願いした。私はその体裁を整え、最終的には評価委員会と研究科長室会議で、その内容を確認していただき、本書の当該部分を完成させたのである。

その意味で本報告書は我々の部局の英知を集め、真摯な点検を行ったもので、それゆえ私のような微力なものでも、なんとか委員長の責務を果たせたといえる。だが、この過程でいくつかの課題も明らかになった。

まず点検活動の最初の段階では、個々の評価単位に点検を依頼せざるを得ないわけだが、評価委員がその点検内容を必ずしも熟知しているとは限らない、という問題がある。それは当然のことであるが、たとえば広報委員長から提出された評価報告について、私がなすことは誤字脱字の確認以上のことではなかった。こうした評価作業の細分化・専門化にともなう、評価のクロスチェックの困難さは想像を超えるものであった。

また研究活動については、その評価を専門にする委員会ではなく、私たち評価委員会で検討する他なかったが、本報告書では執筆論文を個別に列記するという事はしなかった。それは、総合科学を目指す我々の部局の場合、論文のタイトルだけで、その内容を相互に理解することは極めて困難だからである。そこで今回は研究科の研究活動の評価に際して、論文・著作については件数のみをあげ、外部資金の受け入れや、外部機関の委員への要請数などをとりあげ、点検・評価を行った。しかし、私としてもそれが唯一正しいやり方とは当然考えておらず、評価委員からの批判もあった。ぜひとも各位には、研究評価の方法について、ご意見をお寄せいただきたい。

その他、エビデンスの整理の仕方についても、その方法論を確立する必要性を今回痛感することになった。報告書作成の作業が遅れたのは、委員長である私に責任があり、支援グループの各位には、突貫工事で資料の整理、再加工などをお願いし大変な迷惑をかけた。この場をかりて、改めてお詫びしたい。しかし、この作業を通じて、点検に必要なデータの所在場所と、その生データの整理・加工、そして蓄積・管理の方法について考えることができたのは、「怪我の功名」であった。今後は評価委員会の責任で、そのノウハウを蓄積していかなければならない。

本報告書には不十分な点も多々あろうが、平成 21 年度～23 年度の総合科学研究科・総合科学部の教育・研究活動の全体が示されている。そして個々の構成員がその全体を知っているわけではない。報告書の内容を部局のメンバーの共通認識とし、今後の活動に生かすことができたとき、はじめて私たちの仕事も一応の完成をみるのであろう。（水羽信男）